

佐伯泰英

Saeki Yasuhide

ヒカソ青の時代 の殺人



集英社

佐伯泰英

Saeki Yasuhide

ヒカソ青の時代 の殺人

集英社

初出誌

「小説すばる」

一九九二年三月～五月号

ピカソ あお 青の時代 じだい の殺人 さつじん

一九九二年九月二五日 第一刷発行

著者 佐伯泰英 さへき やすひで

発行者 若菜 正

発行所 株式 集英社

東京都千代田区一ツ橋二・五・一〇

郵便番号 一〇一・一五〇

編集部 (〇三) 三二三〇・六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇・六三九三

制作課 (〇三) 三二三〇・六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万が一ございましたら、小社制作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1992 YASUhide SAEKI

Printed in Japan ISBN4-08-772872-2 C0093

ピカソ 青の時代の殺人 * 目次

第一章 死に化粧 7

第二章 初動捜査 24

第三章 殺人者の影 49

第四章 青の時代 68

第五章 暗闇祭 82

第六章 第二の殺人 105

第七章 棺の中のカサヘマス 125

第八章 四匹^{カトレ・ガツツ}の猫 144

第九章 ピカソの村 162

第十章 第三の殺人 181

第十一章 誘拐そして殺人 213

第十二章 ピカソの洗礼名は？ 235

第十三章 既視感^{デジャ・ビュ} 264

第十四章 供述 289

装幀 スタジオ・ギブ

カバー絵 Pablo PICASSO : "RETRATO DE BENET SOLER, 1903"

© SPADEM, Paris & SPDA. Tokyo, 1992

ピカソ
青の時代の殺人

青の時代、――

賢行者と放浪者が寺の車寄せに住む。乳のない母親たち、百年も生きた鳥、すべての悲しみ、すべての祈り、辻芸人たち、赤い着物を着た太った男、痩せた若い軽業師、器用な道化師、悲しい鈴、陰鬱な太鼓、シヨールをつけた娘、そしてマックス・ジャコブによって二度も祝杯を挙げられたところの永遠に止まらない水車の白い馬。

アンドレ・サルモン「青の時代」から

第一章 死に化粧

暗く、陰うつな昼下り、雨はいったん熄んだ。

深海の底のように沈んだ車の後部席から、悲愁に満ちた調べが流れてきた。そして時折、ぜいぜいという苦しげな喘鳴がまじったが、声の調子はどこことなく陽気だった。

巨大な肉塊のように醜く太った男は手袋をはめた手で緑色の絵具をチューブからひねりだし、死体の顔になすりつけた。ペインティング・ナイフの先端で絵具を器用にのばし、描きかけの作品から視線を遠ざけると仕事具合をたしかめた。

硝煙の付着した銃痕の周りに絵具をかさねる、固まりかけた血の赤と絵具がまじり耳たぶへと流れた。再び作品の出来をチェックした巨体の主は緑の上に黄を加えた。

三〇分後、死体の顔は微妙な陰影をもつ萌葱色に化粧されていた。

絵具チューブとナイフを黄色の布切れにつつま革バッグに仕舞った。

煙草をポケットから取り出した男は、自らがおかれた状況を考えたか、元にもどした。その代りかわらに置いてあったポリタンクの蓋をあけ、ガソリンを車内に撒き、死体にも振りかけた。が、作品の上は避けた。

車の中に鼻をつく臭いが充満した。男の鼻歌は途絶えることはなかった。細心の注意とともにインパネのライターを抜いた。引火具をばらし、用意してあったコードを接続した。タイマーが所定の時刻に

セッティングされてあるのをたしかめた男はライターを元の場所に押しこんだ。

長い吐息がもれた。そしてコードの先端のニクロム線を死体の手の上に、わずかな隙間をあけて吊り下げた。

ポケットから香水壺をだし、まるで金細工師のような手つきで死体に振りかけた。

いま一度作品を点検した。車外の様子をたしかめ、ドアをひらくとそろりと足を濡れた地面に下した。小糠雨がまたしとしと降り出していった。

男はフランス製の香水を撒きながら隈笹の生えた斜面に向って歩いていった。

老いたガードマンは薄明の駐車場にそこはかとなく花の香りが匂っているのに気づいた。

日本中央競馬会の開催日だけR警備保障の制服を身につける吉野久作は、木蓮かなと広大な駐車場のほぼ真中に佇み、暗紫色の花のありかを探した。隈笹の繁った斜面に八重桜が雨にうたれ、重い花をぼつたり咲かせていた。しかし木蓮を見つけることはできなかった。

新宿から京王線で二十数分にある府中市の、東京競馬場一带に気怠い頹廢が漂っていた。京都でもよおされた春の天皇賞の雰囲気、競馬場で味わおうとするファンが残っていた欲望のこもった空気だった。

吉野はこの町に生れ育ちながらまだ一度も競馬場の中に足を入れたことがない。しかし駐車場にもどってくる客の顔色を見れば、その日のレースが順当に終わったか、波瀾の午後か、判断がついた。が、今日は男たちの態度がまちまちで首を傾げたものだった。

地元の信用金庫を退職して一年、臨時の警備員に採用されて五年目になる。

雨に冷えた腰をカップの上から二度三度と拳でたたいた老人は駐車場を見回した。パーキングをかこ

むように丘の上に住宅がならんでいた。

人口二万余の府中市内を東西に二つの段丘が走っていた。武蔵野段丘と立川段丘だ。前者は市の北部をわずかにかすめるだけだが、高低差三〇メートルの立川段丘は市の三分の二にわたってのびていた。府中崖線ともよばれる段丘のあちこちに地下水によって造られた浸蝕谷が見られた。

この第一駐車場も浸蝕谷のひとつだ。

吉野はこの崖筋を「ハケ」とよんできた。高台の住宅街はハケ上、駐車場はハケ下だ。吉野が子供のころにはハケ下にくつも湧水が流れだして水車が回り、わさび田が涼しげに広がっていたものだ。

追憶を絶つと管理事務所にもどろうとした。そのとき、車に気づいた。北西のハケ下に一台乗用車が残っている。

やれやれ、これで晩酌にありつくのが遅れるぞと車に歩み寄った。すると花の香りとは異なる芳香が流れ漂っているのに気づいた。

吉野は小豆色の高級車をあらためる前に見事な八重桜の老樹をしばらく眺め上げた。そして視線を転じて車内を覗いた。室内灯に照らされ、前部席にながながと人が寝ている。待ちくたびれた運転手が昼寝をしているのか、それにしても行儀が悪いなど老眼をしょぼつかせ、窓ガラスに顔を付けた。

限どりをした顔に明りがこぼれていた。

脳天から爪先へ恐怖が走った。飢餓と死のニューギニア戦線から生き残って帰還した吉野久作元陸軍伍長は、死の臭いを嗅いだ。

——なんてこった、死に化粧して死んでやがる。

動揺がおさまらない吉野の眼に炎が走るのが映じた。死体の上を火が走る。た、大変だ！ 吉野は詰所へどたどた走っていった。

男はサイレンの音に手違いが生じたことを悟った。

木陰を出ると小走りに坂道を横切った。暗い公園で黄色い傘が揺れていた。犬を連れた男の児が水道の蛇口からたれる水滴を無心に見詰めている。

男は手袋をぬぎとり、指先に染みた絵具を見た。子供が男に気づき、人なつこい笑いを向けた。男はうなずき返すと、蛇口に口をつけ、ごくごく水を飲んだ。

別の方角からサイレンの音がひびいてきた。騒ぎが鎮まってから行動すべきだ、男の本能が教えていた。

子供と老犬は男の顔に好奇に満ちた視線を向け、無邪気な観察を続けていた。男は小脇に抱えたバッグから絵具をつつんでいた黄色の布を出し、三角に折ると雨にぬれた犬の首に巻きつけた。

男の児がうれしそうに礼を述べ、犬と一緒に去っていった。

夏苺^{なついちご}真左は自転車^{じんしゃ}のブレーキが甘いことに気づいて愕然とした。天地の坂の中程に差しかかり、スピードが上っていた。

くそっ！

府中崖線にそって斜めに下る坂はその先でハケを直角に横切る急坂な道と交差し、競馬場大通りに向う。

一度坂上へ自転車^{じんしゃ}の方向を変えて速度を落すか。府中署刑事課に所属する夏苺には、全日本剣道選手権大会の常連出場者だった剣士の自負があった。

馴染みのカフェ・ネネでビールに口をつけた途端、署から連絡が入った。電話に出ると先輩の武宮義^{たけみやぎ}

「刑事が、真左、事件だと緊張した声で言った。

「焼死体が発見された……」

二十数年前、三億円強奪事件の捜査にも加わった武宮の声音には亢奮の気配があった。

「現場は競馬場東門前の第一駐車場」

ネネは大国魂神社の表参道、通称けやき並木の西側にあった。署に走りもどっても五、六分の距離だ。しかしビールを口にした顔で署に帰るのは勤務時間外とはいえ、気がひけた。

「武宮さん、現場に直行します」

ネネのママ道子にかりた婦人用自転車がおこしかけていた。路面に靴底をこすりつけながらスビードを減じた。右折し、急坂を一気に下って歩道へ、車止めの鉄ゲートを斜めにすりぬけようとした。その瞬間、ペダルが鉄柱に引っかかった。

夏莉の体が高々と虚空に舞い、一回転するつつじの植込みに背中から落ちた。

一八〇センチの長身がながたと花壇に埋った。一瞬、息が詰り、視界が揺れた。

「大丈夫ですか」

初老の警備員が夏莉の顔をのぞきこんでいた。雨が冷たく降っているのを意識した。

「なんとか……手を貸してくれませんか」

左手に夏莉の靴をぶら下げた競馬場の警備員の助けをかりて起き上った。足首がぷっくり腫れている。鉄柱にぶつけたか、痛みもある。脱げ落ちた靴をはく夏莉に老人が言った。

「あんた、額から血が出てるぞ」

夏莉はハンカチで額の傷口を押え、チェーンのはずれた自転車を押して現場に向った。

垣根越しに煌々と光る照明が眼に入った。駐車場入口に自転車を立てかけると出番のなかった消防自

動車が赤色灯をゆっくり回転させながら帰っていくのが見えた。

光の輪の中にまだらに焼けたロールスロイスのボディが浮びあがっていた。高級車はどこどころ消火器から放出された水酸化アルミニウムの白い泡にまみれている。

ハケ上の住宅街から現場を見下す野次馬へ眼をやった夏莉は車に近づいた。ガソリンで焼かれたか、人肉の異臭が強く漂い、夏莉は思わず立ち竦んだ。そして思い直したように職業意識に目覚め、額にあてたハンカチで口を押えるのにじり寄った。

焼けただれた死体からまだ煙がたち昇っていた。胸の上に組まれた両手の指先は白い骨が見えるほど焼けて炭化していた。が、奇跡的にも奇妙な化粧をほどこされた顔は猛火の強襲をまぬがれていた。初期消火の段階で顔に消火器の泡が集中したせいかもしれない。

車内は革の座席、ウォールナッツのインパネ・ガラスと猛火の跡をとどめ、無惨だった。

反対側の窓から武宮刑事が顔を覗かせた。

「焼身自殺ですか」

「殺し」

ぶっきらぼうな口調で武宮が答えた。夏莉はいま一度視線を死体に這わせた。胸の上にニクロム線のようなものが絡み、コードがダッシュ・ボードのライターへ伸びていた。

「射殺だ。銃痕がわかるか」

夏莉は首を振った。異臭がさらに強く鼻孔をついた。

「右のこめかみ、至近距離からだ」

ペテランの刑事は死体から早くも情報を得ていた。夏莉は武宮の差し出すペンライトをかりうけ、光を顔にあてた。絵具を重ね塗ったこめかみが赤くにじんではいけなかった。

「射殺されて焼かれた。火が走った時にな、偶然にもガードマンが車内を覗いていたんだ、それで素早い消火が行われた……」

「なんとも派手な道具立てですね」

急ブレーキの音に振り向くと鑑識車が到着していた。夏莉と武宮は鑑識課員たちに現場をゆずり、ロールスロイスから離れた。

夏莉は口にあてたハンカチをはずすと深呼吸をした。

「身許はまだ分らんでしょうね」

ナンバーを控えようとする夏莉に武宮が、ドアだ、馬頭のマークを見ろと注意した。横腹にサラブレッドの横顔が向き合ってデザインされた紋章が描かれてあった。

「金南三キムナミのロールスですか」

「そういうことだ。行こう」

府中市に本拠をもつナムサン・グループの総帥金南三は多摩地域でも有数の資産家だった。それも小柄な体格の老人が一代できずきあげたものだった。しかし金がいつ府中に移り住んだのか、この町生れの武宮も知らなかった。

昭和二〇年代の終り頃から金南三キムナミ、金立キムリツビ姫の夫婦はビニール袋につめたキムチをリヤカーに積み、乾物屋や八百屋などに売り歩きはじめたらしい。

武宮は子供の頃、形振りかまわず働く韓国人夫婦の姿を何度も見ている。

金はそうして貯めた財を市内各所の不動産に投資していった。ナムサン・グループが急激に成長したのは昭和四〇年代後半に入ってからだ。ラジオ、テレビ、雑誌をつかった風変りな広告とともに焼肉のたれの壩詰めが大ヒットした。

金はさらにスーパー業界に進出し、大成功した。いま府中の角地の何分の一かは、ナムサン・グルー
プのシンボル・カラーの黄色に塗られた建物によって占拠されていた。

しかし一代で成り上った金南三の悪口を言う市民は少ない。この韓国人がだれよりも額に汗して働き、
利益の何分の一かは、社会福祉に還元してきたことを住民は知っていたからだ。そんなわけで馬頭マー
クの高級車は府中で知られた存在だった。

男は武蔵野の面影を濃く残す、雨に濡れた雑木林をかき分けて進んでいた。

白ダモの巨木の下は、重なり合って差しかかる若葉によって雨がさえぎられた分、わずかに乾いてい
た。男が中腰で踏み出した時、茶褐色の動物が足下から走り出て、林の奥に逃げていった。その瞬間、
閃光が走り、男は呆然と立ち竦んだ。体が慄えた。が、林は何事もなかったように元の薄闇に戻ってい
た。

敷地内に入りこむ浮浪者などをおどろかすための仕掛けがあちこちに設けられているのだろうと考え
た男は、巨木の幹のそばに座りこんだ。

そば降る雨の夜の深まりが気温を下げた。発作の徴候を感じた男はあわてて革バッグから一回分の薬
を出し、純金のスプーンの皿にこぼし、ビタミンのアンブル液をたらすと注射針の先で混ぜた。

上着を脱ぎ、ワイシャツをたくしあげた男は上腕部にゴムを巻き、腕の静脈に針を突き立てた。

薄闇にもかかわらず、慣れた動作だった。

目を瞑り、注射器のポンプを押した。ゆるゆるといつもの陶酔がやってきた。寒けも気管支喘息の発
作も忘れた。

下の道路をパトカーが、サイレンを鳴らして通過していったが男の脳裡から不安も恐怖も消え去って